

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370295

研究課題名(和文)17世紀市民劇と18・19世紀徒弟小説の系譜学的対照研究

研究課題名(英文)A Comparative Genealogical Study of Seventeenth-Century Citizen Plays and Apprentice Novels of Eighteenth and Nineteenth Centuries

研究代表者

原 英一(Hara, Eiichi)

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：40106745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、17世紀の「市民劇」と18・19世紀の「徒弟小説」との相関関係の分析により、Richardson等の18世紀小説とDickens等のヴィクトリア朝小説を全く新たな観点から捉え直すことを目的とした。Dekker、Middleton等の市民劇は、ギルド制中の徒弟を近代市民のメタファーに変容せしめた。メタファーとしての「徒弟」はDefoe等による小説ジャンル創造を経て、19世紀へと受け継がれる。本研究は市民的ロマンス劇が、メロドラマを通じて、小説ジャンルに受け継がれていることを明らかにして、18・19世紀イギリス小説に「徒弟小説」という新たな位置づけを与えた。

研究成果の概要(英文)：The objective of the study is to shed a new light on the English Novel from the eighteenth to the twenty-first century by analyzing the historical correlations between the “citizen plays” in the early seventeenth century and the “apprentice novel” after the birth of the novel genre. The plays by Dekker, Middleton and others, centering on the citizens of London, have transformed the figure of the apprentice, a status in the guild hierarchy, to a metaphor of the modern man. The metaphor of the apprentice was taken over by Defoe and Richardson when the novel was created. It has been made clear that the English Novel, or a major part of the genre, has at its core the characteristics of the “apprentice novel”, especially in its melodramatic aspect, originating in the citizen romance plays of the English Renaissance.

研究分野：イギリス演劇・イギリス小説

キーワード：徒弟 小説 市民劇 ロマンス メロドラマ Richardson Dekker

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、長期にわたって、科学研究費の補助を受けるなどして、イギリス小説の本質とその勃興の要因を16世紀中葉以来の演劇史の中に探求してきた。その端緒はディケンズの小説とリチャードソンの小説とが、「債務者監獄」というファクターを共有していることの発見である。

ディケンズとリチャードソンは相容れないメンタリティーを備えている。フィールディング、スモレット、スターン等の喜劇的小説の継承者であるディケンズは、謹厳なリチャードソンとは無縁と考えられていた。しかし、リチャードソンの *Clarissa* において、主人公のクラリッサが最終的に幽閉される現実の監獄(ハーロウ家邸内、ロンドンの売春宿といった、比喩的な監獄とは異なる)が債務者監獄であったことは、文学史的に非常に重要な事実である。周知の通り、債務者監獄はディケンズの小説において、きわめて重要な構成要素となっている。*The Pickwick Papers* のフリート監獄、*David Copperfield* のキングズ・ベンチ、*Little Dorrit* のマーシャルシー監獄は、幼少期に父親がマーシャルシーに収監された経験をフィクションに昇華させたものである。18世紀においても、リチャードソンのみならず、フィールディングの *Amelia*、スモレットの *Roderick Random*、Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* 等々に債務者監獄が表れている。中世以来の債務者監獄の制度は、エリザベス朝、ジェームズ朝の演劇にもしばしば登場していることに注目しなければならない。商業資本主義が急速に発展した16世紀後半以降には、経済活動の敗北者が債務者監獄に収監される状況が、文学のテーマとして重要な意味を持つに至っていたのである。

リチャードソンとディケンズが共有するもう一つの重要な要素は「徒弟」である。リチャードソンは自身が徒弟であった。*Pamela* のヒロインは、女中という身分上、「徒弟」と捉えることができる。一方、*David Copperfield*、*Great Expectations* などのディケンズの自伝的小説は、しばしば「教養小説」として捉えられてきたが、このジャンルのパイオニア的研究者 Susanne Howe は「教養小説」を「徒弟小説」と呼んだ。ここでの徒弟は「人生の徒弟」というメタフォリカルな意味を担っている。しかし、徒弟を本来のギルド制中の身分として捉えるならば、リチャードソンとディケンズが深いレベルで共有するものが明らかになる。

ギルド制中の徒弟は、将来に市民社会の中核である「自由市民」freeman となることが制度上保障されていた。しかし、血気盛んな若者である徒弟は、自己に内在する動物的欲望の衝動によって、出世の階梯から転落する可能性も同時に抱えていた。徒弟の肉体は市民社会の制度と人間の原初的、動物的欲望と

がせめぎ合う場なのである。徒弟の文学的表現は、デッカーの *The Shoemaker's Holiday* という祝祭的喜劇として、他方では Yarrington の *Two Lamentable Tragedies* をはじめとするいわゆる「家庭悲劇」domestic tragedy として、両極の形態をとった。その中間にはベン・ジョンソン、ミドルトン等による、いわゆる「都市喜劇」city comedies がある。悲劇と喜劇を包括して「市民劇」と総称しうるこれらの芝居は、約1世紀をかけて、小説に変容することになったのである。市民劇中での「徒弟」が、ギルド制中の身分を超えて、文明と反文明に引き裂かれる近代人のメタファーと化していたことは、ミドルトンの *The Changeling* や *Women Beware Women* 等の「都市悲劇」city tragedies (研究代表者による用語)において、「女性」が「徒弟」的性格を備えていることに示されている。これはデフォー、リチャードソンが女性を主人公とする形で小説創造に向かったことに直接つながる系譜学的意義を持ち、イギリス小説の底流をなすことになる。

研究代表者は、こうした洞察に基づいて、市民劇からイギリス小説の誕生までを系譜学的に研究し、その成果を平成24年にまとめ、『徒弟たちのイギリス文学-小説はいかに誕生したか』(単著、岩波書店)として刊行した。この著書においては、*Nice Wanton* (1550)等のテューダー朝道徳劇からリチャードソンの *Clarissa* に至る2世紀にわたる歴史において、商業資本主義社会に置かれた個人が経験する矛盾、葛藤、苦悩の文学作品における表現と、それがついには支配的文学ジャンルに根源的な変容をもたらし、イギリス小説という新しいジャンルが生み出される様相を、「徒弟」を指標あるいはメタファーとして記述した。その結果、18・19世紀に興隆したイギリス小説は、市民劇からの系譜上にあるのであって、「徒弟小説」と呼ぶものであること、もはや「徒弟小説」は、とうに使い古され、陳腐化した「教養小説」の別称などではなく、イギリス小説の本質を示すものとして再定義され、再認識されるべきことが明らかとなっている。

この研究成果の上に立つならば、次に研究すべき課題がリチャードソン以後、18・19世紀の「徒弟小説」であることは自明である。これらの小説が、「徒弟」を中心的な指標ないしメタファーとする広大な文学史の流れにその位置付けを新たに与えられることによって、先行研究においてほとんど認識されていなかった、その真の相貌を現すことになるのは確実である。

本研究は、このような学術的背景の下に、計画されたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、17世紀(エリザベス朝末期からジェームズ朝にかけて)の「市民劇」

と 18・19 世紀の「徒弟小説」との相関関係を分析することによって、Richardson, Henry Fielding, Smollett 等の 18 世紀小説及び Charlotte Brontë, Dickens, Meredith, George Eliot, Gaskell 等のヴィクトリア朝小説のキャノンに全く新たな観点から捉え直すことである。イギリス小説の淵源である Dekker, Middleton, Ben Jonson 等の「市民劇」、すなわちロンドン市民あるいはジェントリ階級の下に位置する階層の登場人物を中心とする喜劇及び悲劇は、ギルド制中の身分である「徒弟」を近代市民のメタファーとしての「徒弟」に変容せしめた。メタファーとしての「徒弟」は Defoe, Richardson 等による小説ジャンル創造を経て、19 世紀へと受け継がれる。18・19 世紀イギリス小説のキャノンに「徒弟小説」という新たな位置づけを付与することにより、その真の相貌を明らかにして、英文学史の根本的な書きかえを試みる。

3. 研究の方法

演劇と小説、二つのジャンルにまたがる本研究では、大量の一次資料を渉猟することが前提である。16 世紀から 18 世紀前半までの演劇資料については、これまでの科研費による研究の過程でほぼ分析を終えている。しかし、18 世紀以後の演劇資料の収集と分析は未だ不十分であるので、これらの作業を補完的に実施することとした。小説については、いわゆるキャノンのみならず、「徒弟小説」と関連する資料を、ヴィクトリア朝を中心として広範囲に収集した。研究代表者がすでに確立している小説概念、すなわち近代資本主義と個人の欲望の葛藤の文化的表現という概念が、18 世紀から 19 世紀にかけて、いかに継承され、また変容しているかを分析した。膨大な資料の効率的な収集と分析のためにネット上のデータと市販のデータベースも活用した。

4. 研究成果

本研究の結果、次のような事実が確認されるという成果が得られた。

(1) イギリス小説の淵源が、研究代表者が単著『徒弟たちのイギリス文学 小説はいかに誕生したか』(2012 年、岩波書店刊)において明らかにしたように、16・17 世紀(イギリス・ルネサンス期)の「市民劇」にあることが、18・19 世紀小説の詳細な分析によって、あらためて確認された。

(2) サミュエル・リチャードソン、ヘンリー・フィールディングに顕著に見られる演劇的特徴は、小説ジャンルの底流にある「市民劇」の伝統の表れであること。

(3) デフォーの *Roxana* 等の「犯罪小説」やリチャードソン *Clarissa* に見られる「叛逆」のテーマは、ルネサンス期の「市民劇」、と

くに Robert Yarington, *Two Lamentable Tragedies* や Anonymous, *Arden of Faversham* などの「犯罪劇」に、その起源を求めることができる。

(4) 18 世紀末に誕生したとされ、19 世紀に著しい隆盛を見たメロドラマ及びメロドラマ的小説は、ルネサンス期の市民劇、たとえばトマス・ミドルトンの *No Wit No Help Like a Woman's* などに見られた「市民的ロマンス劇」の発展形であること。

(5) メタファーとしての「徒弟」が、近代市民社会ひいては近代文明そのものと個人との葛藤の場であるがゆえに、20 世紀から 21 世紀にかけてのカズオ・イシグロの小説にもその伝統が引き継がれていること。

これらの成果の一部は、学会における研究発表と論文によって発表した。

平成 26 年度には、日本シェイクスピア協会のシェイクスピア学会においてベン・ジョンソンの *Everyman Out of His Humour* についての研究発表を行った。このテキストはベン・ジョンソンの相矛盾する特質が最も顕著に見られるものである。一方では、芝居としての「かたち」を重視するというジョンソン劇の基盤が維持されていながら、もう一方では、それを転覆するようなカーニヴァル的要素が頻繁に出現する。これまではジョンソンのカーニヴァル的側面が研究されてきたが、この発表においては、カーニヴァルではなく、Revels として、この側面を捉え直した。1960 年代に Philip J. Finkelpearl が John Marston 研究において詳述し、Helen Ostovich が *Everyman Out of His Humour* の Revels Plays 版で紹介した「法学院レヴェルズ」は、まさに「かたち」の中のカーニヴァルであり、ジョンソン劇の特異性の起源であると言えるだろう。テキストの精密な分析の結果、このようなカーニヴァルないしレヴェルズを生み出す原動力は、1600 年前後のイギリス社会に見られる変動であることが明らかになった。商業資本主義の発展は農村においては穀物投機を促進し、都市(ロンドン)においては、商人階級によるジェントリ階級の侵食として表れる。

平成 27 年度においては、前年度に 17 世紀初頭の市民劇の研究を集中的に行ったので、18 世紀およびヴィクトリア朝の徒弟小説の研究を優先的に行った。とくに重視したのは、メロドラマとメロドラマ的小説の研究である。17 世紀以降の西欧市民社会の発展は文学史においても重要な変化をもたらした。中でも、あらためて言うまでもないことであるが、フランス革命が与えた影響は多大であったことは、再度強調されなければならない。革命は文学の面では演劇におけるメロドラマの誕生と隆盛を生み出すことになった。メロドラマ研究で最も重要な貢献をした Peter Brooks によれば、メロドラマには「ポスト聖性時代(post-Sacred age)のマニキアン的ヴ

イジョン(Manichean vision)」がその根底にある。既存の価値観、とりわけキリスト教的価値観が転覆される時代(ポスト聖性時代)に大衆は単純な勧善懲悪の物語を求めた。

しかしながら、メロドラマ的ヴィジョンは、すでにイギリス・ルネサンス期の市民劇の中に見ることができることに留意しなければならない。ロマンス劇が市民社会で変容を遂げた結果生まれた市民的ロマンス劇、たとえば Thomas Heywood の *The Fair Maid of the West*、Thomas Middleton の *No Wit No Help Like a Woman's* などロマンス劇である。それらの演劇の見られたロマンス的部分が、18 世紀の小説とメロドラマに受け継がれている。こうした歴史的に拡張された意味でのメロドラマは、イギリスの 18 世紀では、ジョージ・リロの *The London Merchant* が代表的な作品である。さらに 19 世紀の大衆文学の中でメロドラマは広く浸透することになった。

平成 27 年 5 月に開催された日本英文学会全国大会のシンポジウム「メロドラマの諸相」においては、司会兼講師を務め、研究の主題との本質的関連を視野に入れながら、19 世紀メロドラマの概観と個別テキストの分析を行った。19 世紀の劇場についても研究を進め、とりわけメロドラマ上演の中心であったマイナー劇場の歴史をさらに詳細に研究した。17 世紀市民劇の研究としては、前年度に研究発表したベン・ジョンソンの市民劇 *Every Man Out of His Humour* 研究を論文として完成させ、日本シェイクスピア協会の機関誌に投稿し、査読を受けた結果、採用刊行された。

本研究の最終年度である平成 28 年度においては、研究成果を英語により発信することを最も重要な作業とした。その準備段階として、日本語による研究発表と論文執筆を行った。これらは現代の作家であるカズオ・イシグロについてのものであるが、研究の進展の結果、必然的にもたらされた拡張であり帰結である。イシグロは、その小説技法において、ポストモダンの作家であると認知されているが、実際は、18・19 世紀のイギリス小説の伝統を最も正統的に継承している。日本英文学会における日本語による発表は英語による論文とすべく準備を進めている。研究機関内部の事情により、とりあえず、その根幹部分を、学内の『比較文化研究所紀要』に日本語論文(査読付き)として掲載した。

本研究においては、その最終的成果を英文による著書としてまとめ、英国または米国の出版社から刊行することを目標としている。平成 29 年度以降に、その実現のための具体的な作業に入る予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

原 英一、カズオ・イシグロの文学-マジック・リアリズムと沈黙の語り-、『東京女子大学比較文化研究所紀要』、査読有り、78 巻、2016 年、pp.41-57
DOI: なし

原 英一、『みなそれぞれにヒューマー抜け』の「かたち」と「レヴェルズ」、『*Shakespeare Journal*』、2 巻、査読有り、2016 年、pp.1-12
DOI: なし

原 英一、ディケンズとトウエイン、そのペンミズムの軌跡、『*マーク・トウエイン: 研究と批評*』、査読無し、14 巻、2015 年、pp.67-86
DOI: なし

〔学会発表〕(計 3 件)

原 英一、カズオ・イシグロの「喪の作業」、『日本英文学会第 88 回全国大会、2016 年 5 月 29 日、京都大学(京都府京都市左京区)』

原 英一、野田 学、奥村 真紀、金山亮太、シンポジウム:メロドラマの諸相、『日本英文学会第 87 回全国大会、2015 年 5 月 23 日、立正大学品川キャンパス(東京都品川区)』

原 英一、ジョンソン劇の「かたち」と「レヴェルズ」-『みなそれぞれにヒューマー抜け』を解剖する-、『第 53 回シェイクスピア学会、2014 年 10 月 11 日、学習院大学(東京都豊島区)』

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6．研究組織

(1)研究代表者

原 英一 (HARA, Eiichi)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：40106745

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：

(4)研究協力者

なし ()